インタビュー② 継続したボランティア活動の重要性を実感

山下友宏さん（市内の企業に勤務／琴浦在住）

個人ボランティアとして、がれきの撤去のほか、被災者に寄り添ったボランティア活動などにも参加。主に仕事が休みの土・日曜日に支援を行いました。（長崎県島原市の出身）

山下友宏さん

◇ボランティア活動の動機

平成3年、高校生だった私は雲仙普賢岳噴火という大規模な自然災害を身近に体験しました。その際に、全国から多くの支援があり、いつかは恩返しをしたいと思っていました。

その後、新潟県内の企業に勤務していた平成16年7月、新潟・福島豪雨災害の被災地に初めて災害ボランティアとして参加しました。

◇東日本大震災、被災地でのボランティア活動について

被災地でのボランティア受け入れ態勢が整った4月下旬、連休を利用し、災害ボランティアとして岩手県陸前高田市気仙町上長部地区での活動に参加しました。黙々と腐ったさんまの片付けをする多くのボランティア、遠くから見守る被災者の姿など、現地での光景が強く印象に残っています。自分たちボランティアに直接あいさつをされる被災者の方は少なかったのですが、いつも遠くから見られている感じがして緊張感がありました。

震災から1カ月半が経過し、復興に向けて前向きに歩き始めた人々が注目されていましたが、多くの人は無くしたものの大きさに、立ち上がることすら大変な状況だということを再認識しました。

7月頃までは屋外でのがれき撤去、住居の泥だしなどが中心でした（陸前高田市、大槌町、釜石市箱崎地区でボランティア活動）。当時は、被災された方の心情に配慮して、写真撮影は厳禁でした。まだ、警察による行方不明者の捜索も続いていてブルーシートで覆われた捜索の現場に手をあわせている地元の方々の姿もありました。自分自身は、いろいろな活動の現場で休憩時間などを使い、亡くなられた方へ黙祷することにしていました。

◇被災者に寄り添ったボランティア活動

遠野市でのボランティア活動では、被災者に寄り添うことを念頭に置いた支援活動に参加しました。平成7年の阪神淡路大震災から始まった避難所での足湯ボランティアとしての活動（「足湯隊」と呼んでいます）。また、8月からは、仮設住宅への移住が進み、新しいコミュニティ作りのきっかけになるよう始まった「カフェ活動」（集会所などで実施）にも参加しました。新たな人間関係の支援に重心を移している時期で、いろいろな試行錯誤がありました。

個人ボランティアの皆さんと（一番右が山下友宏さん）

◇ボランティア活動を通じての印象と今後に向けて

今の私は結婚・育児で積極的なボランティア活動はできませんが、出来る範囲での支援を模索中です。6年が経過した今でも真の復興は何年先になるのかわかりませんが、それを望む人々の役に立ちたいという思いを忘れません。

また、昨年、私も実行委員として開催に関わった「東日本大震災語り部講演会（秋田市開催）」をにかほ市でも開催したいと思っています。陸前高田市で被災され、避難場所の立ち上げに関わった方の生の声を市民の皆さまにも是非、聞いて欲しいと思っています。

インタビュー③ 自然災害発生時の初動対応・現場の経験から

小松雅人さん（内閣府政策統括官（防災担当）付企画官／院内出身）

自然災害発生時の初動対応を担当。防災担当大臣・復興大臣の秘書官も経験されました。（にかほ市ふるさと宣伝大使）

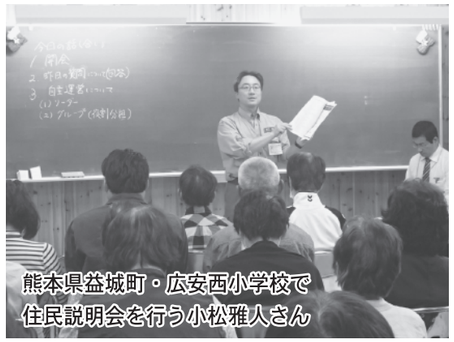
◇仕事内容の紹介

内閣府防災担当は、大規模な自然災害への対処をその任務としています。その中で私は初動対応を担当しており、すぐに被災現場に飛ぶ役回りです。

最近では、平成27年9月の関東・東北豪雨、昨年の熊本地震、台風第10号（岩手県）、新潟県糸魚川市の大火の現場などに派遣され、被災自治体と一緒に対応に当たってきました。例えば熊本地震のときは、4月14日の最初の震度7の直後、その日の夜のうちに自衛隊機で熊本に派遣されました。

◇災害時の市町村対応について

災害対応は、一義的には市町村の役割です。災害対策本部を設置し、被害の状況を把握し、住民の安否確認や救助・捜索活動を行い、避難所を開設し、その管理・運営を行うなど、普段は経験しない膨大な業務をこなす必要があります。


熊本県益城町・広安西小学校で住民説明会を行う小松雅人さん

しかし、実際には発災時に行政機能が低下してしまう例が多くあります。

熊本地震の際、ある町役場は役場庁舎が被災し、さらに役場職員の多くが避難所に張り付きになってしまったため、役場が空洞化し、しばらくの間機能していませんでした。

各自治体の防災担当職員は、過去の災害対応、特に失敗事例に学ぶところが非常に大きいと思います。

◇市民の皆さまへのアドバイス

にかほ市は、近年大きな自然災害を経験していません。市民の方々も、災害を身近なものとして感じていない方がほとんどではないでしょうか。しかし、阪神・淡路大震災の前も、熊本地震の前も、「この地域に大きな地震はない」とまことしやかに言われていました。本当ににかほ市は災害が少ないのでしょうか？例えば、１８０４年の象潟地震で、海底が隆起して陸地になったことは市民のほとんどの方がご存じだと思いますが、そのときの地震でどれくらいの犠牲者が出たかはご存じでしょうか。また、お住まいの地域のハザードマップはご覧になったことがあるでしょうか。

災害時に大切なことは「自助・共助・公助」と言われます。まず、「自助」、自らの身を守ることです。例えば地震に対しては、住宅の耐震化、家具の固定、ガラスに飛散防止フィルムを貼るなど、個人でできる努力がたくさんあります。食料等の備蓄も大変重要です。

岩手県知事と防災担当大臣の意見交換に同席（写真右奥が小松さん）

次に「共助」です。普段の地域のつながりが、災害発生時には生きてきます。平成26年の長野県北部地震で、白馬村では多数の住宅が倒壊したにも関わらず犠牲者はゼロでした。普段から、高齢者や要援護者がどこに住んでいるか、いざというときにその人を助けるのはだれの役割かを、地域で話し合ってマップを作成・共有しており、実際に近所の方々によって救い出されたからです。皆さんも、お住まいの地域で災害発生時の対応について話し合う機会を設けてみてはいかがでしょうか。